



特集

— 建築のまちを旅する — 16

湯沢・横手

人々との縁から広がった

白井晟一の地方建築での試み



表紙の写真

〈試作小住宅(現・顧空庵)〉

和室から玄関方向を見る

設計 | 白井晟一
移築設計 | 白井原太(白井晟一建築研究所・アトリエNo.5)

1953(昭和28)年に東京都世田谷区上野毛に竣工し、2007(平成19)年に所有者の住む湯沢に移築された住宅。移築設計を手がけた白井原太氏は白井晟一の孫にあたる。試作小住宅の名の通り、狭小でも空間に豊かさを生み出すさまざまな試みがなされている。和室の出入り口上部は、フリーハンドで描いたように柔らかな曲線のかまぼこ形。移築の際は型を取って再現し、土壁も上塗りを掻き落として再利用した。視線の先には、自然の樹木の造形を活かした袖壁、庭の緑が揺らめいて映るガラス入りの玄関扉、と趣あるレイヤーが重なる[写真:石田篤]

左写真

〈奥田酒造店(奥田邸)〉

畳敷きの床の間の床柱まわり

設計 | 白井晟一

湯沢より少し北に位置する大仙市で、300年以上続く酒造家の店舗兼住居。1階の座敷は二間続きで、襖を閉めて分けても使えるように、それぞれに床の間がしつらえてある。写真は下座にあたるほうのそれで、畳から生えたように床柱を立て、上部は落とし掛けで床の間を表現。その脇のコーナー部には火灯窓の一部のようなデザインの窓を設けている。伝統論争において拡大解釈の立ち場をとった白井らしい大胆な意匠だ

[写真:石田篤]

LIXIL eye no.28
2023年1月20日発行

発行 | 株式会社LIXIL
編集発行人 | 對馬儀昭
LIXIL Housing Technology
TH統括部
〒141-0033
東京都品川区西品川1-1-1
大崎ガーデンタワー 24階
Tel: 050-1790-5838
Fax: 03-4363-6434
制作 | 株式会社フリックスタジオ
デザイン | 株式会社ラボラトリーズ
印刷 | 竹田印刷株式会社

* 本記事の無断転載を禁じます
* 本文中の敬称は省略させていただきました

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。
<http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/>

CONTENTS

特集

04 建築のまちを旅する | 16

湯沢・横手

06 テーマ1

人々との縁から広がった
白井晟一の地方建築での試み

ナビゲーター | 白井原太

12 大館木材会館(現・保安産業社屋) / 奥田酒造店(奥田邸) / 四同舎(旧・湯沢酒造会館) / 試作小住宅(現・顧空庵)

16 湯沢・横手建築めぐり

22 住宅クロスレビュー | 16

まちに開く

古谷俊一「大森ロッテ新棟 笑門の家」× 常山未央「不動前ハウス」

32 建築家の〈遺作〉 | 13

宮本忠長「北斎館(第3期)」

談 | 宮本仁夫・西澤広智・松橋寿明

36 新世代・事務所訪問 | 16

伊藤 維

ナビゲーター | 門脇耕三

44 構造家の新発想 | 16

金物を使わない木造架構

黒岩裕樹

48 触覚デザイン | 13

前川國男のドアハンドル

ナビゲーター | 笠原一人

52 土木のランドスケープ | 16

渋谷川

ナビゲーター・文 | 八馬 智

58 TOPICS

エクステリア バーチャル施工写真集「E-Real@site」を開設。

企画から設計、施工までトータルでサポート

文 | 遠藤雅人

60 INFORMATION

LIXILビジネス情報サイトのご案内 / LIXILからのご案内 / 展示のご案内

64 紙上の建築 | 16

AAの森

トラフ建築設計事務所

湯沢・横手

特集 建築のまちを旅する 16



湯沢、横手は秋田県南部の中核都市。

どちらも城下町であり、奥州街道と並び東北を縦断する羽州街道に面している交通の要衝だ。街道沿いに商家が見られる、歴史建築のまちである。特に蔵が独特で、豪雪に耐える建屋の中に蔵が立ち、保管庫だけではなく、冠婚葬祭などで家族の特別な居間として使う内蔵には、他にはない特徴がある。そしてなんとといっても建築界で湯沢のまちを有名にしたのが、白井晟一の建築群だ。白井はこの地にできた縁で、秋田県の北は大館から南は秋ノ宮まで、重要建築を残していった。あるときは豪雪地の常識を破りながら、地域に革新的な空間を示して見せたのだ。その建築は世代を超えて白井ファンを生み、手をかけて大切に使うという動きも芽生えつつある。特に湯沢は、試作小住宅が移築され顧空庵として再整備されるなど、まちなかの歴史資源を案内していく動きがあり、たびたび訪れておきたいまちである。

築50年以上たったのち、東京から湯沢に移築された「試作小住宅（現・顧空庵）」の庭側の外観。緩勾配の切妻屋根から延びる深い軒は、白井晟一の木造建築に共通して見られる特徴であり、ここでは屋根を軽快に見せるために軒先にテーパーをかけて薄くしている。湯沢は豪雪地だが、移築の際も元の意匠を尊重して部材を太くすることはせず、軒先の屋根の板金材の下に薄いシート状の発熱体を敷き込み、融雪させることで軒の負担を軽減することにした【写真：石田篤】

テーマ1

人々との縁から広がった 白井晟一の地方建築での試み

ナビゲーター | 白井原太 (白井晟一建築研究所・アトリエNo.5)

取材・文 | 長井美暁
写真 | 石田 篤 (特記以外)



白井晟一

しらい・せいいち

1905年京都府生まれ。本名は成一。1928年京都高等工芸学校図案科卒業後、ドイツのハイデルベルク大学とベルリン大学で哲学などを学ぶ。帰国後、独学で建築家としての道を歩む。書籍装丁の仕事や書家としても知られる。1983年逝去。現存する主な建築作品に「松井田町役場」(1956、群馬県安中市)、「善照寺本堂」(1958、東京都台東区)、「ノアビル」(1974、東京都港区)、「親和銀行本店」(1975、長崎県佐世保市)、「渋谷区立松濤美術館」(1980)、「静岡市立芹沢銈介美術館(石水館)」(1981)などがある【撮影：白井彪介】

01 | 試作小住宅 (現・顧空庵)

1953年。2007年移築。15ページ参照



02 | アトリエNo.5

東京都中野区に1952年竣工。当初は画家のアトリエとして設計され、のちに白井が自身の仕事場とした。現在も白井晟一建築研究所として使われている【写真：佐藤 剛】

異端の建築家といわれる白井晟一は、戦後の1940年代後半から60年代にかけて秋田県南部の湯沢・横手地域で多くの建物を設計した。そのうちのいくつかは現在も活用されている。湯沢は白井が東京に設計した「試作小住宅」が移築された地でもある。

湯沢・横手での仕事は戦後の白井の仕事の出発点となった。しかし地縁があったわけでもないのに、なぜ設計の仕事を得られたのか。白井晟一の孫で建築家、さらに湯沢市ふるさと応援大使を務める白井原太氏の案内で、いまに残るこの地の白井建築を訪ねた。

終点秋田駅のひとつ手前の大曲駅で秋田新幹線を降り、奥羽本線に乗り換えて湯沢駅に向かう。到着まで東京から4時間以上。稲穂が頭を垂れる沿線の田園風景を眺めながら、新幹線も特急もなかった時代はどれだけ時間がかかったのだろうと想像する。建築家として本格的に世に出つつあった白井晟一が仕事でたびたび湯沢を訪れていたときは、夜行列車を利用していたのかもしれない。1950年代から60年代にかけては東北地方から関東地方への出稼ぎや集団就職が盛んだった。

ナビゲーターの白井原太氏とは「試作小住宅(現・顧空庵)」⁰¹で待ち合わせた。白井晟一の設計により1953(昭和28)年、東京都世田谷区上野毛に建てられ、2007(平成19)年に所有者が住む湯沢市に移築された木造平屋の住宅だ。到着すると、道路から真正面に柱と梁による構成的な妻面が見えて、気持ちが高まる。移築設計を手がけた原太氏によると、上野毛のときと同じ方位で建てるとこの妻面が道路側から見えないこと、そして冬場、屋根に積もった雪が北側に落ちて融けにくいことから、時計回りに90度、方位を変えて配置したという。

初期の住宅設計での試みが 詰め込まれている

この住宅の設計を白井に頼んだのは所有者の渡部三喜氏の両親で、東京の学校で学ぶ息子と娘の拠点をつくるためだった。体があまり丈夫ではなかった母上が、冬に湯沢の寒さを避けて東京で過

ごせるようにする目的もあった。

渡部氏と姉が最初に住み、次に姉がこの住まいで新婚生活を送ったあとは、親類縁者が代わる代わる住み継いだ。半世紀にわたって使われる間、母上は折に触れて訪れ、維持管理に目を配っていたという。その母上が2004(平成16)年に他界した際、「上野毛の土地を売却するときは、建物を壊さず、大切にそのまま住んでくれる人に譲ってほしい」という趣旨のメモを遺していたことから、渡部氏は建物の保存を条件に土地の買い手を探すとともに、原太氏に連絡を取った。

しかし、条件に合う売却先は見つからず、解体もやむを得ないという状況に落ち着きつつあったとき、渡部氏はいよいよ見納めという覚悟で上野毛の家をひとりで訪れ、一晚を過ごした。そして自身が住んでいた当時のことや親との関係などを思い出すなかで、この家を葬り去るわけにはいかないと、思いに駆られ、湯沢への移築を決断。原太氏も、建物に対する渡部氏の深い愛情に応え、上野毛に建っていたときとほぼ同じ姿を湯沢で復元できるように計画を進めた。原太氏は「僕が生まれ育った木造住宅(アトリエNo.5⁰²)が同時期に祖父が設計したものであったので、建物の雰囲気やディテールに共通点があり、身近に感じました。なにより上野毛ですと大切に使われてきた状況を目の当たりにして、できるだけそのままの状態に移築したいと思いました」と振り返る。

移築の際は、基礎と設備関係と屋根の板金を上野毛に残したくらいで、再利用できるかどうかわから



04 | 山内家住宅

7代当主が1931(昭和6)年から4年の歳月をかけて建てた。設計は秋田出身で東京に建築事務所を構えていた高堂徳治。主屋は桁行12間半、梁間5間半の切妻造妻入り2階建てで、深緑の釉薬瓦を葺いている。梁を数段重ねた妻面や、正面・側面に取り付く多くの庇など変化に富む外観だ。敷地内にはほかに裏座敷、文庫蔵、道具蔵、商品蔵、穀蔵が立ち並ぶ。建物に使われている大量のケヤキ材などは5代当主の時代から収集されたもの。建設時期は世界恐慌や昭和東北大飢饉と重なり、職人の仕事が多かったことから、雇用対策も大きな目的だったといわれる。原太氏は「建物はもとより、呉服店時代の什器、オリジナルの照明などの保存状態も良く、ご当主とご家族の強い思いを感じます。湯沢の大きな財産だと思います」と話す

ないものも含めて部材の8-9割を湯沢に運んだ。平屋の小住宅ということもあり、13.5トントラック1台で移送できたという。

建物の中に入ると、そのままの状態に移築されたことがよりよくわかる。天井の高さを抑える一方、庭側の開口部に大きな建具を設けるのは白井の他の住宅にも見られるものだ。また、天井や床の間などの造作、床のアビトン材や収納面材のラワン材など、そこここに白井独特のディテールや白井が好んだ材料を見ることが出来る。「試作小住宅という名の通り、祖父が1950年代前半の住宅設計でいろいろ試していたことが詰め込まれたようなところがあります」と原太氏は語る。

浴室周りは唯一、そのままの状態ではなく、手を加えた。当初の建物には脱衣所がなかったが、湯沢ではゲストハウスとして使われることを考えると必要との判断から、東南側を半間ほど出っ張らせる形で増築して脱衣所を設けた。ただし外側立面の開口部などの構成は建設時の姿を維持している。

江戸時代に銀山で栄えた湯沢

両親が大切にしてきた白井建築を後世に引き継いでいきたいという渡部氏の思いは、移築後に一層強まっていると原太氏は感じている。湯沢の父と慕う渡部氏のその思いを受けとめ、原太氏は渡部氏の子息とも交流をもちながら「顧空庵」を見守り、また、顧空庵が湯沢の観光振興や地域活性に貢献できることもあるのではないかと考えている。

原太氏は2020(令和2)年から湯沢市ふるさと応援大使を務め、市内に残る近現代建築の保存活動にかかわるほか、この地域の文化や歴史を子どもたちに知ってもらうために、建物や景色を描くというスケッチワークショップを定期的に行っている。「よい建物が残っていても、結局、活かし方によってその建物の運命は分かれます。市民の皆さんに有効な活かし方を考えてもらうには、まずはその建物を

知ってもらうことが大事で、そのような機会や場をつくっていくことは建築に携わる者がやらなければならないと思うのです。

湯沢は「東北の灘」と称されるほど酒造りが盛んなことに加え、稲庭うどんや川連漆器が名産だ。秋田木工⁰³もこの地で100年以上の歴史を築いてきた。しかしいづれも、湯沢という地名と結びついて知られているとは言い難い。「湯沢の人は外に向かって積極的に発信することが少なく、もったいないと思っています」と原太氏。そもそも地元の良さや特徴に気づいていないところもあるので、市外の人間だからこそわかるそれらを、建築やまちづくりの分野で発信することに努めている。

原太氏に「湯沢にいらしたのなら、『山内家住宅』⁰⁴もぜひご覧になってください」と勧められ、一緒に向かった。山内家住宅は羽州街道沿いに立ち、市内の伝統的な町家のなかでも最大級の規模をもつ。山内家は文化年間から昭和にかけて呉服商を営んで栄え、現在の建物は7代当主が1931(昭和6)年から4年の歳月をかけて建てた。2階建てだが3階建てに近い高さがあり、道路側は梁を重ねた重厚な妻面を見せる。竣工時も、街道沿いの建物のなかでひときわ目を引いたという。

歴史を紐解くと、1602(慶長7)年には佐竹義種が城主として湯沢城に入城し、湯沢は佐竹南家の城下町としてまち並みが形成されてきた。佐竹氏は関ヶ原の戦い後に現在の茨城県から秋田県に移封され、そのときに付き従った商家も多かったようだ。1606(慶長11)年に「院内銀山」が発見されると、藩直営の銀山として繁栄し、「天保の盛り山」と呼ばれた最盛期には城下町久保田(いまの秋田市)をしのぐほどの活況を呈したと伝えられる。湯沢が古くから酒造りが盛んなのも、院内銀山という大消費地を抱えていたからだ。山内家住宅は、湯沢の歴史の一端を窺わせるものといえる。

このような湯沢と北隣の横手で、白井は数々の建物を設計した。きっかけは、義兄・近藤浩一路⁰⁵と交

03 | 秋田木工

1910年の創業以来、日本で唯一「曲木」の技術を専門としてきた家具工房。その高い技術力は柳宗理や剣持勇など名立たるデザイナーに愛された。関連17ページ

05 | 近藤浩一路

水墨画家(1884-1962)。白井晟一の義兄。東京美術学校西洋画科卒業。当初は洋画家を志していたが、同級生の影響で水墨画を始めた。結婚後、新聞社の漫画記者として活躍した時期もある。墓所は東京上野の寛永寺にあり、墓碑は白井晟一のデザイン(銘書は中川一政)。白井がデザインして実現した唯一の墓碑で、その時期は白井が湯沢・横手で多くの仕事を手がけたころに重なる

06 | 本野精吾

建築家(1882-1944)。東京帝国大学工科大学建築学科を卒業後、三菱合資会社の技師となり、武田五一の招聘により京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学)教授となる。中村鎮式コンクリートブロック造の自邸や西陣織物館(現・京都市考古資料館)などの作品が現存する

07 | 林美美子

小説家(1903-1951)。苦難に満ちた放浪生活とさまざまな職業を経験後、『放浪記』がベストセラーになり人気作家の仲間入りを果たした。生前最後に出版した小説は『浮雲』。亡くなるまでの10年間住んでいた家は建築家の山口文象が設計したもので、現在は新宿区立林美美子記念館になっている



09 | 稲住温泉 浮雲

1949-1952年竣工、木造2階建て。1階にダンスホール、カウンターバー、ティールーム、2階に宴会用広間を配した社交・娯楽施設。白壁に斜め格子の窓の外観は北ヨーロッパの山荘を思わせる。白井はこの建物で、都会の人々が温泉施設に求める郷土的特性と、地域の人々が温泉施設に求める都会的な要素を兼ね備えることを意図したと述べている。愛称の「浮雲」は、この建物の建設中に急逝した林美美子が同時期に出版した小説名を想起させる。2012年撮影 [写真: CollaJ 塩野哲也]



10 | 旧・秋ノ宮村役場

1950-1951年竣工。羽後病院に続いて秋田で設計した2作目。秋田の風土から生まれた民家のプロポーションを公館の規模へと拡大。大きな切妻屋根と深い軒というその姿を、川添登は「翼をひろげて、いまにも飛びたとうとする鳥」と表現した。この左右の軒を支えるために、他の白井建築では見られない斜材の支えが現れていることも特徴だ。建設当時は、緩勾配の大屋根や長い軒は雪の重さに耐えられるのか、暖房効率は悪くないのか、議論になった。竣工後に一冬越して、その心配はまったくの杞憂だったことが証明された。2002年撮影 [写真: 磯達雄]



11 | 横手興生病院

1966-1970年竣工。施工は、横手市の株式会社大和組。1階に炊事室、2階に広間兼食堂、3階に病室を擁する厨房棟(左の写真)は、円弧がくりぬかれたアルミ合金鋳物で外観が覆われている。連続するパターンがつくり出す華やかな印象は病院ではなくホテルのようだと評された。患者に楽しい雰囲気を感じさせたいという建主の意図を汲んだものと考えられる。右の写真は管理棟。地元では「蜂の巣」の病院と親しまれ、2008年の解体の際には外壁の一部が保存され、新しい建物に活用された。2002年撮影 [写真: 磯達雄]

08 | 羽後病院

1948年竣工。現存せず。白井が秋田で初めて設計した建物。ウィング・システムと呼ばれるY字型プランが特徴

遊のあった稲住温泉の当主・押切永吉のもとに、戦時中、書籍などの荷物を疎開させていたことだった。

哲学に傾倒した学生時代

白井は1905(明治38)年、父・七蔵、母・えんの長男として京都の三条大宮で生まれた。白井家は代々、銅を扱う豪商だったが、当時はすでに廃業に近く、油屋を営んでいたという。

1917(大正6)年、白井が12歳のときに父が死去。白井は7歳上の姉・清子の嫁ぎ先である近藤のもとに弟とともに身を寄せた。近藤は水墨画家で、清子が通っていた京都女子美術学校に絵画指導で来ていた縁で結ばれた。近藤は清子より14歳上だ。

近藤一家の住まいは東京本郷にあった。白井は青山学院中等部に進学し、第一高等学校を目指すのが受験に失敗。卒業後は東京物理学校(現・東京理科大学)に籍を置く。

関東大震災で近藤の住まいが焼け落ちたため、近藤家は京都に転居。それに伴い、白井も京都に戻った。近藤家には藤田嗣治や中川一政などの画家仲間がしばしば逗留し、にぎやかだったという。そして翌年の1924(大正13)年、京都高等工芸学校(現・京都市工芸繊維大学)図案科に入学。図案科の担当教授は建築家の本野精吾⁰⁶で、当時のカリキュラムには建築装飾などもあった。

しかし白井は「学校になじめなかった」と後年語っている。代わりに、英語講師として来ていた哲学者の戸坂潤に兄事し、戸坂の紹介により、京都帝国大学哲学科教授で美学美術史学の講座をもっていた深田康算⁰⁷の門をたたき、哲学に傾倒していく。

修業年限は本来3年のところ、4年かけて京都高等工芸学校を卒業した1928(昭和3)年、母が死去。これを機に、深田の勧めもありドイツのハイデルベルク大学に留学。入学願書では哲学科美術史を第1希望としたが、語学の壁に阻まれ、美術史の教授アウグスト・グリーゼバッハの講義でゴシック建築に興味をもつようになる。そして3年後にベルリン大学に移ると、在独邦人向けの左翼新聞『伯林週報』の編集に携わるなど、社会主義的な思想への関心を深めた。

ドイツ留学中には、義兄・近藤の個展開催を手伝うためにフランス・パリを2度訪れ、のちに美術評論家となる今泉篤男や作家の林美美子⁰⁷などと交流。『放浪記』で得た印税でパリに半年間滞在中だった林と白井は恋に落ちたといわれる。しかし林には日本でその帰りを待つ夫がいたため、ふたりの仲はそれ以上続かなかった。

白井は1933(昭和8)年、シベリア経由で日本に帰

国。この滞欧期に得た経験と人脈は、白井が建築家の道に進むときに重要な核心となった。

義兄の人脈から始まった秋田での仕事

白井が携わった最初の建築作品「河村邸(旧・近藤浩一路邸)」が完成したのは1936(昭和11)年のこと。のちの所有者の名前が付いているが、当初は義兄一家の住居兼アトリエとして東京郊外に建てられた。近藤は建築家の平尾敏也に設計を依頼し、白井は京都にいる近藤夫妻に代わり、建築に関する決めごとを取り仕切るという役目のはずだったが、実質的には設計の多くを担うことになり、最終的に完成した家を平尾は「私の建てた家ではなく白井氏の建てた家」といった。白井は建築の実務を経験したことがなかったため、木造の参考書や数寄屋の本などを読み、独学を重ねたという。この家はハーフティンバー様式の構造に日本瓦の屋根がのり、玄関は煉瓦積みによるアーチ形。内部も洋と和の要素をあわせもつ、独特のものだった。

やがて白井のもとには、設計の依頼が舞い込むようになる。それらは近藤のもつ文化人の人脈からもたらされる依頼であることが多く、近藤自身も2軒目の自宅や山梨県の別荘の設計を再び白井に委ねた。白井が戦後、湯沢・横手で次々に仕事を得られたのも、近藤の人脈が発端だった。

戦後の1948(昭和23)年、近藤扱いの横手市の画商・旭谷正次郎の紹介で秋田の文化講演に招かれ、白井は初めて秋田の地を踏んだ。このときに県の関係者から羽後町立「羽後病院」⁰⁸の設計を依頼されたのが秋田での最初の仕事となった。羽後町は湯沢の隣町だ。

その工事中、戦時中に荷物を預かってもらった礼を兼ね、稲住温泉の押切を訪ねたところ、別棟「浮雲」⁰⁹の設計を依頼された。さらに押切の推薦で「旧・秋ノ宮村役場」¹⁰の設計も手がけた。また、白井ののちに「横手興生病院」¹¹の設計を手がけたきっかけは、稲住温泉に滞在中、当時の病院長と湯沢市内の美術品店で出会ったことだったと伝えられている。横手興生病院の設計を手がけた縁で、近隣の山裾に「昨雪軒」¹²という住宅を設計する機会も得た。

稲住温泉では「浮雲」のほかにも本館の玄関や、離れの客室「嵐亭」¹³「漣亭」¹⁴「杉亭」の設計もものに手がけた。離れの3つの客室はそれぞれ、小さいながらも茶室を備えている。当時の湯沢には、大阪出身で父の代から住友家に入出入りする大工の家系だったという棟梁・岡野福松¹⁴が移り住んで



12 | 昨雪軒

横手市に1968-1971年竣工。施工は、横手市の株式会社大和組。木造に見えるが、雪国ということに配慮して鉄筋コンクリート造の住宅だ。前面道路からの人目を門屋によって遮蔽し、その内側に2段になった前庭が配されている。この白砂と岩による枯山水の庭を左側からぐるりと回り込み、さらに建物内の黒御影石が敷かれた薄明かりのポーチを通して玄関に至る。屋根は瓦葺きだったが、雪対策により軽量の銅板で葺き直された [提供: 株式会社大和組]

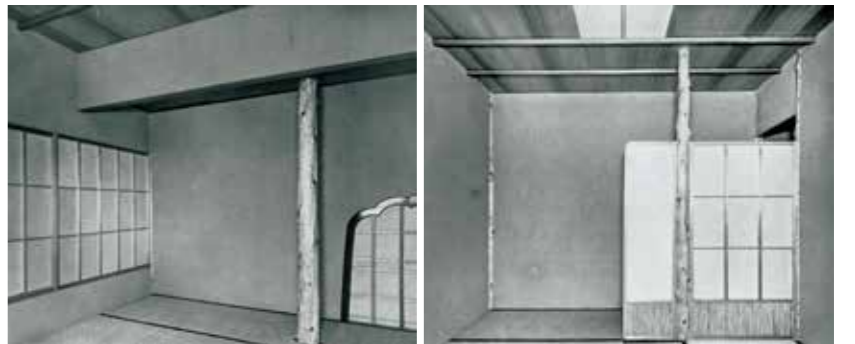


13 | 稲住温泉 嵐亭、漣亭、杉亭

3棟とも1959-1963年竣工。敷地内の豊かな自然を借景として存分に活かすように、建設当時は点在していた。「嵐亭」では池に向かって半円形の広い濡れ縁が張り出し、「杉亭」では段差をつけて高くなった続き間を背に、池側に一段切り下げた細長い洋間を配して通り庭に見立てるなど、どの客室も凝った意匠だ。また各室とも小さいながらも茶室を備える。稲住温泉は押切氏一族の手を離れ、2019年から共立メンテナンスが所有。写真は、2012年時撮影の玄関(左)および嵐亭内観(右) [写真: CollaJ 塩野哲也]

14 | 岡野福松

大工棟梁(1900-没年不詳)。大阪に生まれ、住友家出入りの棟梁だった父のもとで修業し、父の隠居後は棟梁の間を渡りながら東京、名古屋、徳島を遍歴。西園寺公望の別邸「坐漁荘」(1920)など格式の高い住宅に職人として携わりながら腕を磨いたという。「琅玕席」や「奥田酒造店」など、数寄屋風の和室を特徴とする建物を手がけている



15 | 琅玕席

1949-1950年完成。「小野之里」の銘柄で知られた高久酒造の酒蔵(1926年築)の2階につくられた茶室。酒税監査の役人などを接待する場として利用された。壁面は出節丸太と聚楽土壁で構成され、天井は杉材の竿縁。独立して畳上に立てられた床柱は、畳の継ぎ目から壁側にややずれて配置されるなど、いくつかの意図的な「ずらし」が存在する。これは白井が好んだ手法だ [出典: 『近代建築』建設情報社(現・近代建築社)、1954年10月号]



16 | 半宵亭 (鷹の湯温泉)

白井がかかわり、1952-1954年に改修工事が完了。当時の写真から、数寄屋建築の「土庇」のように大きく張り出した庇を円柱で支えるファサードなどに、白井風のスタイルを見て取れる。また宿泊棟は、外観や客室の開口部や階段、手すりなどに白井らしいデザインや他の白井建築で見られるディテールが残る【出典：『近代建築』建設情報社（現・近代建築社）、1954年10月号】

18 | 四同舎 (旧・湯沢酒造会館)

1957-1959年竣工。14ページ参照

19 | 奥田酒造店 (奥田邸)

1957年竣工。13ページ参照



20 | 大館木材会館 (現・保安産業社屋)

1953年竣工。12ページ参照



17 | 旧・雄勝町役場

1956-1957年竣工。火災で焼失した木造庁舎の建て替えだったことから、鉄筋コンクリート造で建てられた。議場や議員室を広く取るために2階が大きく張り出しており、このキャンチレバー（片持ち梁）は「原爆堂計画」と類似するところがある。旧・雄勝町は2005年に湯沢市と合併し、この建物もしばらくは湯沢市役所雄勝庁舎として使われたが、耐震構造の不安などを理由に解体計画がもち上がり、市民団体が建物の維持管理を引き受けて新たな活用方法を探ったものの、2017年に解体された。2002年撮影【写真：磯達雄】

おり、岡野のもとには若く優秀な職人が集まっていた。白井は、湯沢にかつてあった旅館・高田屋本店の当主の依頼で「山月席」という客室を設計したときに岡野と出会った。かねてより岡野の仕事ぶりを知っていた当主が、白井の設計を岡野に任せようと施工を頼んだからだ。高久酒造の酒蔵2階につくられた茶室「琅玕席」¹⁵も白井と岡野が組んだもので、岡野を中心に数寄屋建築に精通した職人たちのつながりは、秋田における白井の木造建築の成立に大きく寄与した。

また、道を挟んで稲住温泉の反対側に位置する「半宵亭 (鷹の湯温泉)」¹⁶の設計にも白井は携わったとされている。「浮雲と同じデザインが見られるんです。鷹の湯温泉は地元の人が日常的に訪れる宿、対して稲住温泉は特別感のある比較的高級な宿なのですが、そういうことに関係なく同じようなテイストを志向し、特に差別化しなかったというのは興味深いところです」。半宵亭での白井の仕事に関する情報や資料は少ないため、原太氏は当主と連絡をとりながら調査を進めている。

異端の建築家と呼ばれた白井が、湯沢でこれだけ多くの人と出会い、仕事の幅を広げていたことは驚くばかりだが、建築の近代化が都市に偏っていた時代に、白井は地方に新しい建築文化の息吹を伝える使命を自覚していた。地方に目を向けるこの意識は、学生時代やドイツ留学時代に傾倒した社会主義的な思想から続くものだろう。

白井は建主の期待や要望に設計で応え、湯沢での信頼を高めていった。2作目の公共建築となる「旧・雄勝町役場」¹⁷は、その信頼から設計を依頼された。残念ながら2017（平成29）年に解体されたが、「旧・秋ノ宮村役場」は道路拡幅のために取り壊しが決まったのち、1991（平成3）年に稲住温泉の当主だった押切氏一族が建物を買い取り、同温泉の敷地内に移築した。このような逸話も他では

なかなか聞かない。

この建物を守るために酒をつくっているようなもの

湯沢に残る白井建築で最も規模が大きい「四同舎 (旧・湯沢酒造会館)」¹⁸は市街地に立つ。現在、この建物を所有・管理するのは湯沢で設計事務所を営む清水川隆氏だ。もともとは市内の酒造各社の出資により設立された株式会社酒造会館が、集会施設として1959（昭和34）年に建てた。そして2012（平成24）年に、同社がこの土地と建物を売却するというときに、白井建築研究会を主宰する清水川氏が購入した。

四同舎は鉄筋コンクリート造で、外観からはモダンニズム風の印象を受ける。中に入ると吹き抜けの大きなエントランスホールに迎えられ、軽やかな廻り階段が上下階をつなぐ。「住宅では卓袱台を退かして布団を敷くような生活をしていた昭和30年代にこのような空間で、市民はびっくりしたことでしょ」と清水川氏は話す。

清水川氏は横手で生まれ育ち、白井が設計した横手興生病院を見るたびに「不思議な建物だ」と思っていた。大学進学の際に建築学科を目指したことから、白井晟一という建築家の存在と、白井がその不思議な建物を設計したことを知り、卒業論文も白井建築について書いた。その後は稲住温泉の離れの客室の改修設計を手がけ、今は白井建築の所有者と、まるで白井に導かれるような人生だ。清水川氏は「この建物は1961（昭和36）年の秋田国体のときに、市民の集会所がないということで民間が協力して建てたもの。私としては、再び市民のための集会所に戻したいという夢があります」と語り、どのような利活用が可能かを模索しているところだ。

湯沢の白井建築をひと通り見たあとは北上し、

大仙市と大館市に足を延ばした。両市にはやはり1950年代に建てられ、完成当時の姿形をほぼ残しながら、現役で使われている白井建築がある。

大仙市の「奥田酒造店 (奥田邸)」¹⁹は、この地で延宝年間から300年以上続く酒造家の店舗兼住居で木造2階建て。現当主の奥田重徳氏は19代目で、白井に設計を頼んだ先々代は銘酒「爛漫」の醸造元である秋田銘醸の役員を務め、「四同舎の建設の打ち合わせで白井先生とお会いして、自家の設計をお願いしたのではないかと思う」という。

1階の座敷や2階の個室などを見せてもらうなかで、奥田氏は、照明器具や壁紙を変えた以外は「一切手を加えていません」と話す。1階の座敷は庭に面して開口部を大きく取り、軒の出が深い。深い軒は、庭を眺める際に空が隠れ、木々へと意識が集まることを意図したものといわれるが、「勾配が緩くて長いので、冬は2週間にいっぺんは雪下ろしをしないと、雪の重みで窓ガラスも障子も襖も動かなくなる。住み手としてはなかなか大変です」と奥田氏。さらに、眺望を妨げないようにその軒を支える柱は少なく、設置間隔も広い。5年ほど前からはついに軒先が垂れ下がってきたため、パイプを立てて応急処置を施している。このように雪国の暮らしに合わない部分はあるが、「白井先生の建築ですから、必要に応じて修繕しながら、できるだけそのまま残していきたいと考えています。いまはこの家を守るために酒をつくっているようなのですよ」と奥田氏は笑う。取材の少し後にも2階の外壁の修繕工事が予定されていた。

車をさらに走らせて到着した大館市は県北に位置する。1953（昭和28）年に大館駅前に建てられ、1970（昭和45）年に現在地に曳家された「大館木材会館 (現・保安産業社屋)」²⁰は現在、電気工事業を営む保安産業の代表者夫妻が所有し、1階を事務所、2階を住居として使っている。会館側から話があり、1998（平成10）年に土地と建物を購入した。

同社代表取締役の三浦孝子氏によると、2階は大空間のホールを住居に改修したが、1階の間取りは変えていない。玄関側で円弧を描くように立てられた壁もそのままだ。ただやはり建物を使い続けるには更新や修繕が必要で、特に窓まわりは防寒対策として、1階は外側にアルミサッシを設置して二重窓にしたり、2階はアルミサッシに入れ替えたりした。

三浦氏はこの建物を購入するまで白井の名前も知らなかったが、いまはできるだけ長く建物を使いながら残していきたいと思っている。「建物は使ってこそ価値が出てくるのではないのでしょうか」。そう話す三浦氏は、建物購入時に残されていた大きなテーブルと椅子を気に入っており、それらも白井がデ

ザインしたものではないかと思い、2階の小部屋に大切に保管している。

湯沢時代と晩年の建物は明らかに違う

「祖父の人生をたどると、1960（昭和35）年がひとつの区切りになるんです」と原太氏。この年に白井は戦後初めてヨーロッパを旅し、その途中、建築評論家の川添登²¹に手紙を送った。そこには、ヨーロッパのまち並みはロジカルに組み立てられ、隙がないようなイメージを若いころはもっていたけれど、もっと生々しく、人間の生活に根差したものだということこの旅で感じ、解き放たれた、楽になった、というようなことが綴られていた。

「その旅からの帰国後は、設計が実際が変わっていきます。湯沢に残る祖父の建物はその前につくったもので、晩年の建物とは開口部のつくり方も材料も使い方も明らかに違う。さらにこの時代のものは、本人がクライアントと直接、かつ綿密にやりとりしていて、1週間と置かず手紙を書くなどしていた。そのような祖父の建築への向き合い方を知ると、この初期、といっても年齢はすでに40代から50代でしたが、湯沢時代のもは晩年のものより僕にはしっくりくるところがあります」。

白井が公共的な建築を手がけるようになったのは晩年のため、初期に設計した建物で実際に見られるものは少ない。しかし湯沢にはまとまって残るうえ、旅館のように宿泊できる建物もある。この利点を湯沢の活性化に活かしていけないだろうか。原太氏にとって力強い仲間になるのが、ヤマモ味噌醤油醸造元7代目の高橋泰氏だ（関連20ページ）。高橋氏は大学で建築を学び、家業を継いだあとは、味噌醤油という伝統産業に新たな価値を示す活動に力を注ぎながら、拠点とする湯沢市岩崎地区のまちづくりも進めている。

原太氏は試作小住宅の移築を機に初めて湯沢を訪れて以降、この地の人たちとのつながりを深めている。「父・彪介に湯沢に連れて来られたことはないのですが、僕は息子を時々連れて来ています。先々建築をやらせようというわけではなく、人とのつながりから生まれたものを見せたくて。父も祖父と一緒に来たことがあったそうです」。

白井は人のつながりから、建物という「モノ」を湯沢・横手にいくつもつくった。原太氏は人のつながりをもとに、湯沢・横手で「コト」をつくり出そうとしている。いつの世も、人々のつながりから新たな動きが起こる。白井が湯沢に残したものは建物だけではないのだ。

21 | 川添登

建築評論家（1926-2015）。1950年代に雑誌「新建築」編集長を務め、そのときに「伝統論争」を仕掛けた。白井はこの論争において、丹下健三とともに重要な論客とみなされた



願空庵にて。原太氏は湯沢を訪れた際は、渡部氏の厚意でここに泊まらせてもらっている。「この建物にかかわってから、時に耐え得る建築とはどんなのか、そして、人と建築の関係性によって、活きた建築として残っていくものあり方について考えるようになりました」と話す【写真：編集室】

白井原太 しらいげんた

1973年東京都生まれ。1997年多摩美術大学美術学部建築学科卒業。設計事務所勤務を経て、2000年より白井晟一建築研究所。建築、内装デザインの仕事のほか、祖父である建築家・白井晟一の仕事の保存、利活用にも取り組む。まち並みや建築を描くことがライフワーク。著書・編書に『白井晟一の手と目』（鹿島出版会）、『白井晟一、建築を語る：対談と座談』（中央公論新社）など。2020年より秋田県湯沢市のふるさと応援大使を務める。

長井美暁 ながい みあき

編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

大館木材会館

現・保安産業社屋

1953年

設計 | 白井晟一

木材王国のシンボルとなる建物

北秋田製材協会が大館駅前の敷地に建て、1970 (昭和45) 年に現在地に曳家された。現在の所有者は電気工事業を営む保安産業の代表者夫妻で、1998 (平成10) 年に土地と建物を購入し、1階を事務所、2階を住居として使っている。

緩勾配で切妻型の大屋根を架け、正面2階にバルコニーを設けた外観は「旧・秋ノ宮村役場」(1950-1951) によく似ている。違うのは、外観の正面中央で軒を支える太い通し柱の存在だ。竣工直前の地元紙に「木材王国秋田のシンボルともいべき」「森林国に相応しい木材会館を建設すべく白井組 (東京) の設計で木材建築の粋を凝らして」と記されており、この柱はまさに秋田を象徴するものだったと思われる。

内部は、2階は住居に改修されているが、1階は円弧を描く壁面、木製建具と障子の召合せのディテール、扉のドアノブの付け方など白井らしさや工夫がそこに残る。竣工式典で撮影された写真には関係者一同とともに白井の姿が見られるので、施工業者が大屋根の庇を勝手に短くしたために白井が激怒し自作として認めなかったという説の真偽は不明だ。



1



2

- 1 正面中央で軒を支える通し柱は約58cm角の太さ
- 2 1階のエントランスホール。中央に見える壁は円弧を描く
- 3 開口部の既存建具と障子の召合せは扇形に開いていても、ぴったり突き合うようにつくられている



3

奥田酒造店 (奥田邸)

1957年

設計 | 白井晟一

空を隠し、庭の木々へと意識を集める深い軒

大仙市で延宝年間から300年以上続く酒造家の店舗兼住居。現当主の奥田重徳氏は19代目で、白井に設計を頼んだ先々代は「爛漫」の醸造元である秋田銘醸の役員を務め、「四同舎」の設計者を選ぶ際、白井を強く推薦した。

木造2階建て。のちに茶室を増築した際に廊下を改築したり、店舗側の暖炉の煙突を撤去したりした以外はほとんど手を加えていないという。内部で特徴的なのは1階の二間続きの座敷で、広い庭に対して大きな開口部を設けている。開口部から延びる深い軒は窓際の天井高とほぼ同じに抑えられ、室内から庭への連続性を感じさせる。「建設前からあったこの庭を活かすように白井先生は計画したと聞いています。軒が深いのも、座敷に座って庭を眺めたときに空が隠れ、木々へと意識が集まることを意図したものだそうです」と奥田氏は語る。座敷は襖を閉めれば二間を別々に使えるフレキシブルな設計で、両側に床の間がしつらえてある。

2階には主寝室や子ども部屋、個室などが配されている。主寝室や子ども部屋からも庭の眺めを楽しめるほか、庭とは反対側に位置する個室が空間として孤立しない工夫に白井の想像力を感じる。

- 1 二間続きの座敷から庭を見る。深い軒は雪の重さで壊れても補修しながら維持してきたが、柱が3本しかなく、間隔も開いているため、先端が垂れ下がってきた。そこで応急処置として単管で支えている
- 2 階段の手すりは酒米を蒸すための巨大な釜で煮て曲げたとされている。白井建築には特徴的な階段が多く、そのなかでも特異な形状をもつ手すりだ
- 3 奥田氏が高校生のころ、自室だった2階の個室。畳敷きの小上がりと板間から成る。壁上部の障子を開ければ視線が抜け、天井の低さを感じない
- 4 1階座敷の上座側。一般的な床の間のつくり
- 5 1階座敷の下座側。床框は設けず畳に丸柱を直接立て、落とし掛けて床の間を表現する手法は、この前に完成した「琅玕席」で見られた。コーナーには火灯窓の一部を切り取ったような地窓を設けている



1



2



3



4



5



1

MAP 5

17

四同舎

旧・湯沢酒造会館

1957-1959年

設計 | 白井晟一

軽やかさと重厚さを内外の意匠で表現

「爛漫」の秋田銘醸など複数の酒造会社が出資し、1961(昭和36)年の秋田国体に向けた集会施設として建てられた。市民ホールのような機能を兼ね備え、関係者の結婚式などにも使用されたという。「四同舎」は白井による命名だ。

鉄筋コンクリート造だが、外観は白色テッセラタイル(割れ肌タイル)の壁に黒塗りの銅板を張った柱により、組積造と鉄骨造を組み合わせるように見える。吹き抜けの玄関ホールは建築面積の6分の1を占める大きな空間で、花崗岩でつくられた軽やかな廻り階段が上下階を大らかにつなぐ。採光のために設けられた複数の開口部と、外部から連続する白色テッセラタイルにより、光が広がり明るい。

1階には日本間の集会室、2階には板張りの広い会議室がある。2階会議室は南側に大きく開口部を取り、道路側からは想像できない光あふれる空間をつくっている。

現在の所有者である清水川隆氏は、この建物の設計者を選ぶコンペの応募資料であるパースを見たことがあるという。他の応募者のパースがカラーであるなかで、白井だけは白黒。しかしその表現力と迫力に「時代を超えて、ハッとさせられるものがあつた」と語る。



2



3

- 1 玄関ホールと廻り階段。外壁の白色テッセラタイルが内部まで連続する。階段の浮いているような段板は花崗岩製
- 2 2階の会議室。壁や天井の仕上げ材は白井建築でよく用いられるラワン材
- 3 外観。屋根は木造で、コンクリートスラブの上に載せている。清水川氏は当時の技術的な限界から、防水層を守るために置き屋根のようにしたのではないかと推察する

MAP 5

18

試作小住宅

現・顧空庵

1953年、2007年移築

設計 | 白井晟一 移築設計 | 白井原太(白井晟一建築研究所・アトリエNo.5)

小住宅で目指した豊かな空間

湯沢市で代々医師の家系である渡部家の姉弟が東京の学校に通うために、世田谷区上野毛の約14坪の敷地に建てられた。「学舎」と呼ばれ、2006(平成18)年まで親類縁者が住み継いだのち、湯沢の現在地に移築され、「顧空庵」という名のゲストハウスに生まれ変わった。解体保存工事は寺社や文化財の修理なども手がける東京の風基建設が担当し、湯沢での復元工事は渡部家の直営のもと、出入りの職人たちにより行われた。

小屋束を壁の中に隠し、横架材と柱だけを現した妻面の意匠は白井独特のもの。内部は田の字プランで、板間の勉強室と4.5畳の和室がつながったワンルームを主室とし、他に3畳の和室と水まわりがある。主室中央の丸柱は大黒柱のように見えるが、実は梁に接続しておらず、あくまで意匠だ。試作小住宅の名の通り、狭小住宅でも豊かな空間を生み出す試みが随所にあり、小さいながらも濃密な空気が漂う。

白井が提唱した「真壁式大壁」もこの住宅で初めて試みられた。独自の配材により二重壁とし、パイプスペースと通気断熱層を確保するものだ。



1



2



3

- 1 道路側の外観。妻面は柱と梁と開口部による構造的な意匠
- 2 台所。左手に脱衣所と浴室がある
- 3 机と本棚が造り付けられた勉強室
- 4 勉強室から和室方向を見る。上半分のみの押入は吊っている。下半分は開放して空間に広がりを与え、多様な使い方も可能にしている



4

湯沢・横手 建築めぐり

YUZAWA・YOKOTE

- 参考
- ・『SD』鹿島出版会、1976.1
 - ・『現代の建築家：白井晟一』鹿島出版会、1976
 - ・『建築文化』彰国社、1980.9ほか
 - ・渋谷区立松濤美術館 編著『白井晟一入門』青幻舎、2021
 - ・『新建築』新建築社、1996.6、1980.7、1997.9、2001.8、2002.11ほか
 - ・文化庁 国指定文化財等データベース (https://kumishitei.bunka.go.jp/bsys/index) 2022.11.1アクセス
 - ・『増田細見読本』増田町観光協会、2022
 - ・湯沢市ホームページ「湯沢市の文化財」(https://www.city.yuzawa.jp/site/bunkazai/) 2022.11.1アクセス
 - ・湯沢市教育委員会編「図録 湯沢市の文化財」湯沢市、2017
 - ・横手市ホームページ「増田の町並み」(https://www.city.yokote.lg.jp/masuda/index.html) 2022.11.1アクセス

おことわり
04-21ページの作品名称は原則として文化財指定・登録名称とし、ほかは2022年11月時点の施設名称を使用しています。

湯沢は羽州街道のほかに、奥州街道（ここは南部道）から湯沢北部を結ぶ小安街道や、湯沢と日本海の由利本荘を結ぶ本荘街道といった東西ルートの結節点としても発展してきた、雄勝郡の中心地である。雄物川の大動脈と、郡南西部に院内銀山があり、地域経済を支えていた。羽州街道沿いに重要建造物が並ぶ。ここにも内蔵をもつ商家（山内家）が現存。そしてこの地に縁をもった白井晟一の名作が点在するのがこのまちだ。市街地のほか、宮城県にほど近い秋の宮温泉郷にも白井作品が現存する。また、湯沢の北西、羽後町（西馬音内）は本荘街道の宿場町で、はずれには茅葺き屋根民家と棚田があり、里の原風景が残っている。白井晟一がこの地方に最初に建築した羽後病院があった地だ。

横手市の南端に増田町がある。雄物川の支流である成瀬川と皆瀬川の合流点で特に人と物資の往来で賑わった県内有数の商業地。小安街道に商家が並び、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。家族の特別な居間として使う内蔵もいくつか見学できる。増田から皆瀬川を越えてすぐ西隣にあるのが、明治期にいったとき岩崎県となった岩崎地区。地域の名家、味噌醸造元が残り、新しい動きを見せている。

また今回は白井建築をめぐるべく、さらに北の仙北地域にある奥田酒造、青森県に近い大館にある旧大館木材会館もプロットした。

写真 | 小松正樹（特記以外）



奥田酒造店 (奥田邸)
設計 | 白井晟一
竣工 | 1957年
大崎市協和境113
店舗兼主屋は国の登録有形文化財

03 榊山発電所 (旧・院内発電所)
設計 | 不詳
竣工 | 1900年
湯沢市秋ノ宮 榊山153-1、162



山裾に洋風建築が、すっと佇む。院内銀山に電気を供給するために建設された、河川の水を、そのまま発電所に引き込み利用する自流式の発電所だ。建物は、湯沢市院内付近でとれる凝灰岩の石材・院内石を積み上げた石造平屋建てで、現存する県内最古の発電所建築だ。院内銀山の開発は、1606 (慶長11) 年から始められたといわれ、その後、藩が経営。榊山発電所の完成により銀山の電化が可能となり、急速に近代化が進んだ。所有者を変えながら、現在も稼働する貴重な近代化遺産 [写真: 編集室]

02 雄勝文化会館
設計 | 萩津郁夫
建築設計事務所・村田弘建築設計事務所
竣工 | 1996年
湯沢市横堀白銀町49-1



ホール、公民館、図書館からなる複合文化施設。真手には、白井晟一設計の旧・雄勝町役場 (竣工: 1956年、解体: 2017年) がかつてあり、現在は湯沢市雄勝総合支所が立つ。建物南側に設けたガラスのコリドールは、前面道路から裏手まで延びる、積雪に配慮した屋内化されたアプローチだ。メインホールが圧巻だ。ステージ背面は開閉が可能で、外部のパティオと一体で使える。最上階には周囲の山並みを一望できる図書館を配置。さまざまな利用を想定し設けられた会議室や研修室の利用率は高く、この地の人々に愛される文化施設だ

05 佐藤又六家
設計 | 不詳
竣工 | 明治前期
(主屋、文庫蔵)
横手市増田町増田中町63



まちの中央に、豪壮な社寺装飾で飾られた約350年続く商家が立つ。「公開している内蔵で、最も古くマニアックな蔵です」と、増田町観光協会の千田孝八会長。敷地の奥に配置されることの多い内蔵だが、通りから一歩建物に足を踏み入れると、そこはすでに蔵の中だ。これは火災の延焼を防ぐため、村の要請を受けて茅葺きから土蔵造りにつくり変えたためだと伝えられる。蔵はふたつあり、そのひとつが明治前期に建てられたこの店舗兼住居の主屋。もうひとつは幕末から明治前期に建てられた文庫蔵で、昭和初期ごろには、家族の部屋として利用するために座敷間に改造された経緯をもつ。内蔵を含む主屋の一般公開をいち早く始め、内蔵が内外から注目されるきっかけとなった建物でもある。国の重要文化財

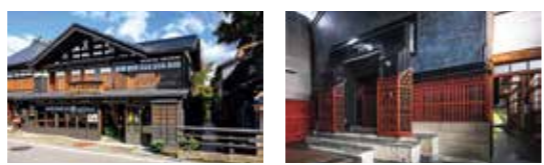
04 観光物産センター 蔵の駅 (旧・石平金物店)
設計 | 不詳 竣工 | 明治中期 (主屋、内蔵)
横手市増田町増田中町103

増田に立つ商家の多くが、間口9~12mほど、奥行き100mほどの短冊状の敷地に、母屋 (軸) で覆われた「内蔵」を多くもつ。住民にとっても特別だという内蔵の存在が広く知られるようになったのは、この数年のこと。ここ「蔵の駅」は、市が家屋の寄贈を受け、観光拠点として整備。敷地の南側に「通り」を設け、「店舗 (ミセ)」「座敷」「居間」「水屋」「内蔵」と並び、増田の商家の典型的なつくりを体験できる。内蔵内部も公開されており、まずはここを拠点に、増田のまちを巡ってみたい



06 山吉肥料店
設計 | 不詳 竣工 | 明治中期 (主屋)、昭和前期 (座敷蔵)
横手市増田町増田中町105

「増田に現存する最も新しい内蔵であり、所有者を変えながら受け継がれてきた内蔵の集大成です」と、千田孝八会長。敷地南側には、成瀬川の水を十文字町方面へ流す用水堰が流れ、間口から裏口までをつなぐ通り土間は光にあふれる。そこに立つ内蔵が圧巻だ。磨き上げられた黒漆喰をまとい、壁にまわされた組子細工は、麻の花をモチーフとした繊細なつくり。手の込んだ仕上げが随所に施されている。「内蔵の扉に段がついているでしょう。1段つくるのに1年かかると言われます。となると、ここは5年。内蔵を見れば、つくられた時代のその家の経済状態がわかるんです」(千田会長)。水屋跡は、現在も台所として使われており、生きた建築に触れていると実感する



大館木材会館 (現・保安産業社屋)
設計 | 白井晟一
竣工 | 1953年
移築 | 1970年
大館市有浦5-1-3

09 横手体育館
設計 | 西原研究所 竣工 | 1979年
横手市条里2-2-40
A・レーモンドのもとで働き、丹下健三に師事した西原清之 (1930-2019) の設計で、新しい都市軸をつくるとともに地方文化の活性化をねらった体育施設。各種大会の開催、交流の場として多くの市民に親しまれている。設計者は、この建築が体育だけでなく、美術展やコンサート、防災避難の拠点など多目的に利用されることを願った。「この建築を見て体育館らしくないと感じる人がいたら、私たちの選択がある程度正しかったことになる」(西原清之「建築文化」1980年9月号) という言葉の通り、エントランスホールと大体育室の特徴的なトップライトは、さまざまな機能を予感させる。豪雪地方における技術的な試みも多くなされたが、施設の老朽化、席数の不足や空調設備 (冷房) が無いことを受け、新築移転が決定。施設は2026年まで利用され、跡地には横手市民会館が建設される。正面とがらりと表情を変える大体育室北側外観も面白い



08 秋田県立近代美術館
設計 | 山下設計
竣工 | 1993年
横手市赤坂富ヶ沢62-46



秋田県の魅力を紹介するテーマパーク「秋田ふるさと村」の敷地内に、秋田ゆかりの作家の作品を中心に収集・展示する美術館が立つ。空を映し出すガラスカーテンウォールの外装をもち、上層の5、6階で2棟がつながる構成だ。赤く見えるのは、斜めに掛け渡されたガラスチューブの中を通るエスカレーターで、1階から5階までをつなぐ。屋外には数々の彫刻が展示されており、建築とあわせて楽しみたい。1995年日本建築学会東北建築賞作品賞、1993年度日本鋼構造協会東北地区連絡会優秀作品受賞

10 横手市ふれあいセンター かまくら館
設計 | 岡田新一設計事務所
竣工 | 1991年
横手市中央町8-12
最高裁判所庁舎や警視庁本部庁舎、宮崎県立美術館など数多くの公共建築物を手がけた岡田新一設計事務所による、コンサートホールや市民広場を備えた観光と文化の複合施設。ガラス張りのアトリウムと重厚なレンガが対をなし、建物上部のポストモダンを思わせる装飾も特徴的だ。内部には、本物の「かまくら」を過年で体感できる「かまくら室」があり、隣接する市庁舎 (設計: 岡田新一設計事務所、竣工: 1989年) と市中心の一角を形づくっている



11 石孫本店
設計 | 齋藤彦右衛門
改修設計 | 小田島工務店一級建築士事務所 (母屋および作業蔵)
竣工 | 1883年 (内蔵)、1910年 (2号蔵)、1897年 (3号蔵)、1900年 (4号蔵)、1916年 (5号蔵)
改修 | 2020年 (母屋および作業蔵)
湯沢市岩崎岩崎162

1855 (安政2) 年創業の味噌・醤油醸造元。明治・大正期に建造された醸造蔵は、1人の大工棟梁が手がけたもので、時代ごとの技術の変遷をたどることができる。創業以来、地元の素材と天然醸造にこだわる同店。「発酵文化を外に開いていきたい」(石川裕子社長) と、県が2017年度から推進する発酵食文化を観光資源として発信する「あきた発酵ツーリズム」の拠点施設として一部を改修。見学通路を設け、石造りの廻廊、巨大な木樽、石炭を使う麦炒り機、味噌・醤油づくりの工程などを驚くほど間近で見学可能だ。物販と飲食スペースにリニューアした事務所と住居の一部は、第1回ウッドファーストあきた木造・木質化建築賞 木質化・リノベーション部門で佳作を受賞。醸造蔵4棟と文庫蔵は、国の登録有形文化財



12

Interior Shop & Cafe momotose

設計 | 不詳 改修設計 | もるくす建築社
竣工 | 明治後期(内蔵)、昭和40年代(主屋) 改修 | 2014年
湯沢市岩崎岩崎160

石孫本店の2軒隣に、内蔵のある古民家をリノベーションしたインテリアショップ兼カフェが立つ。「momotoseさんでうちの味噌の味を知り、訪ねてくる若い人が増えたことも改修に踏み切った理由のひとつでした」と、石孫本店の石川社長。近くで生まれ育ったオーナーの菅澤優子氏は、かねてから黒塀が続く岩崎の古いまち並みや、そこでの暮らしに心惹かれていたという。そのまち並みが、後継者不足などを理由に崩れつつある現状に、「目の前で壊されるのは嫌。ならば活用しながら後世に残していきたい」と店を始めました。縁あって巡り合ったこの古民家は、入り口付近は杉材を多用した明るい空間とし、黒漆喰塗りの内蔵は、床、壁、天井はそのままに建物の魅力を引き出した。カフェで使われている椅子やテーブルなどは商品としても販売。地元産の食材を使ったカフェメニューを目標に、オープンと同時に老若男女が店を訪れる



13

草木ももとせ

設計 | 不詳 改修設計 | 菅澤優子
竣工 | 明治後期(内蔵)、大正期(主屋) 改修 | 2018年
湯沢市岩崎岩崎83

「ももとせ(百年)」の名を冠した施設がもうひとつある。岩崎地区には、明治時代には4軒の酒蔵があった。その蔵のひとつ「峰酒旭(みねのあさひ)酒造」の当主が使用していた高橋家住宅を改修した一棟貸しの宿だ。一棟貸しとしたのは「通常の宿泊施設にすると、さまざまな制約が生じます。せっかくのきれいな状態を変えてしまったら意味がない」と菅澤氏。建具類は丁寧に補修。断熱性能を高め、使い勝手のよい水まわりをしつらえるなど住環境を整え、建物に新たな命を吹き込んだ。家具や照明の配置一つひとつが、古民家での暮らしを具体的にイメージさせ、気づきを与える。宿内の道具は購入可能という仕掛けにも心沸き立つ

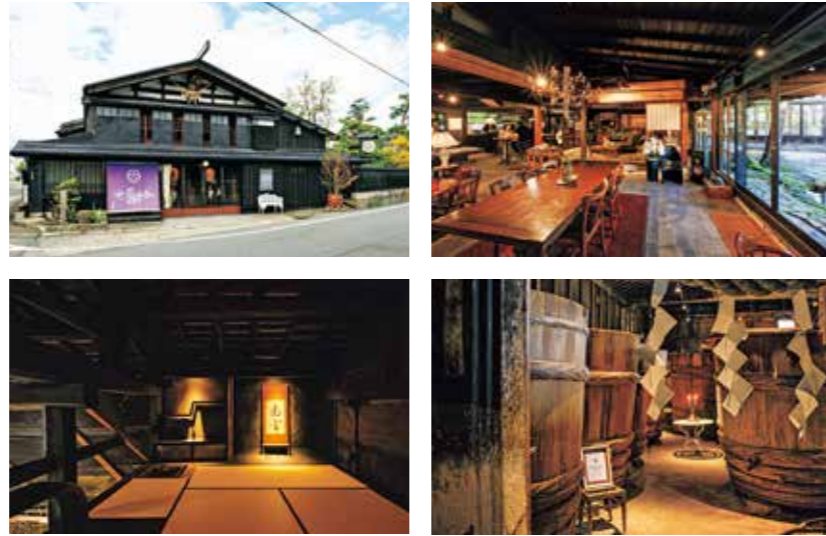


14

ヤマモ味噌醤油醸造元

設計 | 不詳 改修設計(幽玄席) | 白井原太/白井晟一建築研究所・アトリエNo.5
竣工 | 明治前期 改修(幽玄席) | 2021年より
湯沢市岩崎岩崎124

豪壮な店構えに、黒塀の向こうには再整備した約300坪の回遊式庭園「迎菜園(せんしゅえん)」が広がる。初代が味噌・醤油づくりを始めたのは1867年。以来、歴代の当主は、この地の教育・文化の普及にも力を注いできた。7代目当主・高橋泰氏が家業を継いだのは2007年のこと。と同時に、味噌醤油づくりの仕事の魅力あるものにしたとの信念から大改革に踏み切った。パッケージを刷新し、自宅の一部はカフェに一新。独自の酵母菌を使った料理の提供やワインも開発した。この酵母菌を使った料理を、カフェレストラン、調味蔵、さらに白井原太設計で白井晟一の「幽玄」の書にちなんで設けた茶室「幽玄席」や建物全体を巡りながら、一品ずつ供していく体験型ディナーツアーも始めた。発酵食文化の発信だけでなく、岩崎エリアの活性化を目指す高橋氏にとって、挑戦はまだ続く



15

湯沢文化会館

設計 | 佐藤武夫設計事務所
竣工 | 1979年
湯沢市沖鶴103-1



設計者の佐藤武夫は、戦後、各地で文化会館の建設が続くなか、その建築の姿を形づくった音響学者であり建築家だ。劇場やホール設計の第一人者として、数多くの市民会館や公会堂を手がけ、ここ秋田でも、湯沢文化会館を皮切りに、男鹿、能代、大館の市民文化会館の設計を手がけている。建物とその土地との調和にも力を入れた佐藤。佐藤の手がけた建築に多く見られるレンガが、ここ湯沢文化会館でも用いられている。建物の老朽化と施設の利用向上のため、2023年より大規模改修の実施が決定。2025年リニューアルオープン予定

19

旧雄勝郡会議事堂

(現・雄勝郡会議事堂記念館)
設計 | ドイツ人(氏名不詳)
竣工 | 1892年
湯沢市北荒町2-20



市役所のほど近くに、まちのシンボルとなっている建物が立つ。雄勝郡役所の議事堂として建てられ、郡制廃止とともない湯沢町に払い下げられた建物は、その後、湯沢町公会堂、雄勝地方事務所、町役場、市役所、公民館、図書館と機能を変えながら、90年近くにわたり公共施設の役目を担ってきた。役目を終えたのち、1984(昭和59)年に全面改修を実施。その後、復元工事が行われ、竣工当時の姿を取り戻した。現在は記念館として公開。2階の旧議事堂には、夏の風物詩「七夕絵どうろう」が常設展示されている。県指定有形文化財 [写真: 石田篤]

20

木村酒造

設計(事務所) | 清水川 隆/
創建築設計事務所
竣工(事務所) | 2002年
湯沢市市田町2-1-11



創業1615(元和元)年の湯沢で最も古い酒蔵だ。「樽ひとつで酒づくりを始めたのでしょ。その後、奈良や大阪で近代的な酒づくりを学び、蔵を建て増していったんです」と、木村雄太郎顧問。奥羽本線開通直後に描かれた絵図には、あたり一帯水田のなか威風に満ちて立つ酒蔵の姿が記されており、建物正面は近代的だが、入り口から奥へ進めば、築約200年から300年の内蔵、中蔵、遠蔵、新蔵と呼ばれる4つの内蔵がいまも並ぶ。巨大な梁と近代的な小屋組が同時に見られる中蔵は、現役の仕込み蔵だ。2012年には、世界最大規模のワインコンクールで日本酒部門・最高賞を受賞。県内外、海外への情報発信にも力を入れ、蔵人たちの手で、できる限り自然に任せた酒づくりに挑む。展示されている湯沢駅開業当時の写真や道具類も必見だ

16

両関酒造

設計 | 高久三太郎
竣工 | 1923年(本蔵)、1892年(1号蔵)、1908年(2号蔵)、明治末~大正期(3号蔵)、1916年(4号蔵)
湯沢市前森4-3-18

1874(明治7)年創業の両関酒造。繊細な格子をまとった風格漂う母屋と4つの酒蔵(内蔵)は、県内で最初に国の登録有形文化財に登録された建物であり、蔵は貯蔵庫として現役で稼働している。蔵ごとに異なる小屋組を見るのも面白い。米の産地であり良質な水に恵まれた湯沢は、古くから酒造業が盛んだった。しかし、1905(明治38)年の奥羽本線の全線開通後、灘酒が流入。これに対抗するため9代仁右衛門と義弟の2代忠吉の努力によって寒冷地に適した醸造法を編み出し、秋田・東北の酒蔵にも公開。その後の湯沢における酒造業の飛躍的な発展へと導いた。「文化の継承と創造のために、地域の発展のために、人々の和と喜びのために」を胸に、この冬も酒の仕込みにあたる



17

四同舎(旧・湯沢酒造会館)

設計 | 白井晟一
竣工 | 1957-1959年
湯沢市前森1-1
建物は国の登録有形文化財

18

試作小住宅(現・願空庵)

設計 | 白井晟一
移築設計 | 白井原太/
白井晟一建築研究所・アトリエNo.5
竣工 | 1953年
移築 | 2007年
湯沢市湯ノ原1
建物は国の登録有形文化財
※イベント時を除き非公開

21

山内家住宅

竣工 | 1926-1988年
設計 | 高堂徳治/
高堂建築事務所
湯沢市吹張2
建物は国の登録有形文化財
※イベント時を除き非公開

